【 開 催 報 告 】
地域の居場所づくり交流会Ⅷ
「まちなか場づくりのこれから ～プレイスメイキング」

日　　時: 2024年3月3日(土)14:00～16:00
会　　場: ちがさき市民活動サポートセンター
参 加 者:25名

講　　師:
塚越 尭(つかこし あきら)さん（HARAPPA(株)代表取締役、原っぱ大学ガクチョー）
田村 康一郎(たむら こういちろう)さん（一般社団法人ソトノバ理事、生駒プレイスメイキング）
事例発表:
越地 清美(こしじ きよみ)さん（ちがぼ～茅ヶ崎に冒険あそび場をつくろう会 代表）
河内 聖(かわち さとる)さん（ハラペコブックス主宰）

【講 演 1】

塚越 尭さん

私は、原っぱ大学ガクチョーと言って、片仮名でガクチョーと書きます。
株式会社として、9期目となります。 神奈川の逗子で生まれ育ちました。
2002年に株式会社リクルートに入りました。
東日本大震災で、でかい会社で働くのが嫌になり、2012年に「子ども原っぱ大学」という個人事業を始めました。 だんだんそっちの方が楽しくなってしまい、2013年に会社を辞め、2015年に法人化しました。

「HARAPPA株式会社」は何をやっているのか？ 「余」を復権しようと言っています。
余白とか余裕とか余暇とか余興とか。 何分、我々って常に目的に向かって1直線です。 最短距離で最適解を得ることが大事だというふうに思い続けてますけども、もっと回り道したり迷い道したり寄り道したりそういうのでいいんじゃないかと。 そんな世の中を作っていきたいので、「余」を復権しようと言っております。

「余」を生み出す六つのまなざしと言ってまして、「不完全さ」と書いて「オッケー」と読む。「衝動」と書いて「じぶんじしん」と読む。「個々」と書いて「そんちょう」と読む。「間合い」と書いて「おもいやり」と読む。「俯瞰」と書いて「せいじゅく」と読む。「面白がる」と書いて「やさしさ」と読む。
参考: https://harappa-inc.jp/philosophy/

「余」と言うと、私は忙しいから「余」が無いんだという話になりがちです。どんなに忙しかったり、都会に住んでても田舎に住んでても、自分自身と他者を見る眼差しに「余」を持てれば、「余」はもてるんじゃないかと思ってまして、こういう眼差しを持てる仲間を増やしていくことを事業の根幹に置いています。

「面白がる」と書いて「優しさ」と読むダブルミーニングが個人的に大好きでして、正しさじゃなくて、楽しさみたいなことをベースにやり取りをする。それによって人と繋がり合えるんじゃないか、と思っております。

ここからは「原っぱ大学」の話をします。「ちがぼ～」さんと、価値観、世界観を共有していると思います。いわゆる大人と子どもが思い切り遊ぶ場を作ってます。 我々が、世の中の冒険遊び場と違うと思うのは、会員制サービスとして提供していることです。お金をいただいて受益者負担でこれを実現しているということです。

神奈川県逗子市、千葉県佐倉市、大阪府茨城市に直営の拠点を持っています。まずは、逗子の話をします。逗子は、茅ヶ崎と比べて非常にコンパクトで、人口 58,000～59,000 人くらいの小さな街です。 逗子の良さは、山と海と駅がすごく狭いエリアにありまして、我々は、標高90m ぐらいの山の上にフィールドを持っています。

街と山と海と川、全部が半径 1 キロぐらいにあって、遊べるのが圧倒的な魅力です。 僕らのフィールド自体は山の中であるんですけども、夏になったら海に降りて行って筏で遊ぶし、川を探検したりもするし、街にも繰り出せる。 そんな風に遊び場をつくっています。

活動紹介です。 超巨大な弓矢を作って飛ばす。 次は、豚の丸焼きですね、楽天で子豚として売っています。一頭 25,000 円ぐらいで買えます。毛がむしられて内臓がない状態で届くんですよ。 それを串刺しにして焼くのです。鳥を閉めるのはショッキングじゃないですか。豚も死んだ状態で来るんですけど、最初に届いた状態は生き物そのものですが、それが徐々に肉に変わっていく過程を味わいます。

次は、山に発電機を持っていって、山で映画上映します。 ダンボールを使って自分たちでドライブインシアターを作って映画を見ることをしています。 次は、鳥居づくりです。 2021年1月、コロナ禍真っ只中で初詣を自粛せよって言われていた時期ですね。 そんな初詣は悲しいので、自分たちで山に神社を作ってしまえ、と。セルフ DIY 神社作り初詣です。

竪穴住居風の場所に泊まってみたり、丸木船を作りたいっておじさんが言ったんで、3ヶ月くらいかけてみんなで木を削って、丸木舟をつくりました。 丸木舟で海に漕ぎ出すと、座席の木材が腐っていて、そこにアリがいっぱい潜んでいました。 舟が海水に入るとアリが驚いて出てきて、最初に座った人は噛まれました。

アメリカから来たナーフというおもちゃの鉄砲ですが、これで山の中で戦い合うんです。 当然、大人も夢中になるんですけども、こういう時間こそが宝物であると。 僕は、ただ遊ぶっていうことを大切にしています。何かを得るために遊ぶのは、違うと思うんですよね。 遊びって学ぶためにやることじゃなくて、遊ぶこと自体が目的であるべきだと思っています。

さっきお伝えしたようなプログラムを提供はするけど、それを強制しない。 あくまで場に来ていただく理由としてやるだけです。 子どもがたき火をやっていたい、虫を追っかけたいたい。 プログラムをやるためにその場にいるのではなく、心が遊んでる状態になれるかどうかということを、大切に場をつくっています。

そこが場の妙で、例えばさっきのイカダを作りたいからって子どもが参加する。 親も子どもにイカダを作らせたいと思って参加するんですけども、参加した子どもは、イカダ作りに全く興味なくて、焚き火で遊んでいたいみたいなことがよくあるんです。 我々は、それをよしとする。今日はイカダを作る日だから、みんなでイカダを作ろうじゃないんですよね。 それがすごい大事なところで、イカダを作りたい人は作る。 それぞれがそれぞれのやり方で遊べることを作っていく。 一つひとつにこれは何々遊びとか、必要ないんですよ。

もう一つ、すごく大切だと思うのは「関わり」が遊びを通すと、親子とか兄弟とか、友達同士ってものを超えていく。 焚き火を囲んだ時に、勝手にそこに関係性が生まれる。 いろんな地域から会員が20家族ぐらい集まるんですけど、「初めまして」がすごく多く、子どもどうし、名前も分からずに遊んでいるのです。

これ僕の大好きな「放課後サボール」という古民家の活動なんですけども、僕は全力でファミコン（プレステ）して、それを子どもが隣で見ていて、もう一人は漫画を読んでいる。 誰も一つのことをやってないんです。

今日は場づくりがテーマなので、どんなふうに場を立ち上げてきたのかという話をさせていただきます。どんなきっかけで事業を始めたかというと、私自身、逗子で生まれ育ったのですが、小学校の同級生が逗子で自転車屋さんやってまして、彼は街のあちこちに顔が利いたんです。

自転車屋さんのマウンテンバイクのコースを作りたいって街中にふれ回っていたら、ある時おじいちゃんが、「じゃ、うちの山使いなよ」と、その同級生に声をかけてくれたのです。 そして彼が「その自転車コースを作るのは一人じゃできないから、お前手伝ってよって」と。 最初に何をやったかというと、丸太をどけたり、木を切ったり、草を刈ったりすることから始めたんです。 最初は、原っぱ大学の場所として使うのではなく、自転車コースを作り始めたのだけど、途中で立ち消えになってしまったのです。

結局どうやって使ったかというと、焚き火体験のないような小学校の友達が、毎週 1 回金曜日に集まって焚き火を囲んで飲み会を始めたのです。 大人の遊び場みたいに使った場所で、そのうち自転車屋の友達に相談をして、「原っぱ大学」に使うようになっていったのです。

人が踏み固めるから地面は硬くなるし、そうすると保水力がなくなるとか、山にとっていい影響だけではないと自分たちも認識はしてるんですけども、何年も入られなかった山が、気づいたら、人々の交わる場になっていた。 今では、人がリラックスして集まれる場になっています。

我々がやっていることは、セットアップして「はい、どうぞ皆さん集まってください」ということではなく、一緒に作りながら一緒に遊ぶということ。 完成はしない、そういう場が関わりしろを生み出すのです。

一般のサービスと大きく違うところは、我々が用意してこの中で遊んでくださいということではなく、よくわかんないから一緒にやろうよっていうこと。 でも、やる時は道具をいっぱい持ってくるとか、みんなに声をかけ会計をするとか、巻き込む力にすごく注力しているのが、我々の活動です。

逗子の他に、千葉県佐倉市にも広い山を借りており、大阪にも田んぼを借りています。 人件費はどうしているのかという話ですが、こういう活動は人件費がほぼ全てなので、場所代にお金をかけたらほぼ成立しないと思うので、いかに安く地域の繋がりとコネクションを使っていい場所を見つけるかということが、遊び場づくりの肝ではなかろうかと思います。

活動を続けていると、京急電鉄さんから声がかかり、電鉄が横須賀にもっている50年間塩漬けになっている40ヘクタールの土地をどうにかしたい、という相談が来ています。 今、私たちは、そこの場づくりを京急さんと一緒にやってます。

次は、福島の田村市。 これは現地の一般社団が主体者で、私どものコンセプトだったり、集客広報のノウハウを渡しています。 福島原発から20キロ圏内の町なんです。 子どもたちの外遊びが途絶えてしまっているところに、もう1回外遊びを復活させるということで、我々がノウハウを渡しながらやっています。

次は、鹿児島県の霧島市で、地場の工務店さんと一緒にやっています。 工務店さんが顧客との関係性を作るのに、コミュニティを作っていきたいということで、そのコンテンツとして我々がノウハウを提供してます。

受益者負担でやっていくと財政的にきつくなるので、地場の人づくりやコミュニティづくりをしたい企業と一緒にやるのは、一番筋がいい方法だと思うのです。 ちょっとした余白と遊び心があれば、どこでもできる。 茅ヶ崎では、間違いなくできます。 北の方の里山でも、古民家でもいいですし、公園の1区画でもできると思います。

「放課後サボール」とは、地域の放課後に遊ぶという活動をしています。「原っぱ大学」の通常のサービスは、一家族一日遊びで 16,500 円ぐらいかかるので、どちらかというと都心にお住まいの方をターゲットとしています。 事業として成立するギリギリの価格設定です。 でも、そういうふうにやっていると、地元の子達が遊び場所に余白がないという課題を感じて、「放課後サボール」はどちらかというと地域活動として、安価で地域の子どもたちがサボる時間を作ると。「サボール」とは「サボる」の造語です。 子ども達は、習い事でスイミングやって英語やってサッカーやって、というように放課後に自由な時間であったらいいと思って、地域でやっています。

中学生向けには「ハラチュウ」、原っぱ中学の訳です。男のヨガ教室「俺のヨガ」もあります。我々40-50代の男は、目線が気になっちゃって女性と一緒にヨガができないのです。男だけで集まって、硬い体を必死に曲げてヨガをしたり、焚き火を囲んで語り合うみたいなことをしていました。

その他、我々は事業者として、企業の案件をいくつかやっています。マンション・コミュニティを作ったり、企業の研修をしたり。実はその事業者として生き残っていくためには、個人からお金をいただくだけでは全然不十分で、企業との関係性の中で大きなお金をいただき、その合わせ技で事業を会社として成立させているところです。

事業経営で厳しかったのは、コロナ禍の時期です。原っぱ大学の会員の6割が、都内の港区、目黒区、世田谷区のような地域から参加していて、2割が神奈川県の他エリア(主に横浜、川崎)。2割が逗子に引っ越してきた方々。

そんな方々がターゲットだったので、コロナ禍の県またぎ移動の自粛の時は、本当にしんどかったです。コロナ禍こそ我々みたいな場が必要だったのに、誰も来られないっていうことが、特に2020年の前半からあり、且つ、企業研修も全て止まってしまったため、半年で会社のお金はほぼ底をついたので、一番しんどかったですね。その時「もう潰れそうです、助けてください」と、会員の皆さんに助けを求めたんです。その結果、皆さんからご寄付をたくさんいただいき、息を繋ぎました。
今、個人向けのサービスの売上比率が6割、企業向けが4割ぐらいなんですけど、これではまだ厳しく、個人向け6割の金額を維持したまま、企業向けをもっと増やしていくことによって、事業の安定性を高めていくことを目指してます。

果たして株式会社でやることが正しいことなのか、事業としてやることが本当に正しいことなのかは、よくわかりません。冒険遊び場のこともよく知ってましたけども、プレイパークのプレイリーダーがなかなか収入が得られなくて苦しくなっていくという話は、違和感しかなかった。まずは自分たちが飯を食えるようになることが先だろうという私のこだわりから、株式会社という選択をしました。

会員が支払うサービス単価 16, 500 円は、野外活動の参加費としては割高に映って「お前らそうやって金持ち相手にしようとしてんのか」と随分言われました。「まずは自分たちが生き残ること、それに見合う価値を生みだしていくことに意識を向けています。それだけが正解とも思わない。いろんな形があっていい。
だから、どういう経営方針をとるかは選択だと思います。

【講 演 2】

田村 康一郎さん

私は、生れが宮崎です。大学出て会社勤めをしていた時に、プレスメイキングとう言葉を知り、興味を持ちました。30歳を超えてから会社を退職し、約2年間、ニューヨークでプレイスメイキングを学びました。
帰国後、子どもがまだ小さいタイミングで、妻の実家の奈良の生駒に行くことになりました。現在は、月の半々ぐらい、東京と生駒を往復しながら仕事をしています。企業が進めるまちづくりのコンサルティングの傍ら、ソトノバでは、情報発信とかプレイスメイキングとか、公共の場に関する普及啓発活動などの仕事をしています。
また、住民として、生駒市で地域活動を行っています。

さて「プレイスメイキングとは何ぞや」と、いうことです。ひとことで言うと、人々が協力しながらプレイスをつくるプロセスと言えます。英語のスペースがただの空間だとすれば、プレイスは「場所」とか「居

場所」という感じでしょうか。そこに、特別な思い出だとか愛着とかが生まれ、変化がでてくるのがプレイスということになります。

プレイスメイキングは、かっこいいイケてる場所をデザイン的につくればいいっていう話ではなくて、さらにイベントだけあればいいって話でもなくて、活動を通して地域の経済にプラスの影響が出るとか、人と触れ合うことによって、健康になったり、コミュニティの意識につながるなど、いろんな効果を生む場づくりということです。

日本語に直訳すると「場づくり」ですが、プレイスメイキングは、特に舞台がパブリックスペース（公共空間）というところが特徴です。具体的には、広場だったり公園だったり、道だったり、私有地であっても、誰でも行き来できるようなところであれば、パブリックな場所ということになります。

なぜ公共空間でやることが大事かと言うと、公共空間は基本的に誰にでもオープンで、多くの場合、日常に近い場所にあるからです。そこに、人が滞在したり増えたりすると景色が変わってくるし、偶発的な出会いも出てきて、特に公共のフリーアクセスのところは、そういった価値があると思っています。これまでは、公園などの公共施設は、トップダウンで作られることが多かったのですけれども、地域やコミュニティという、自らの手でつくっていくところが重要な要素です。

ここからは事例を紹介したいと思います。私が住んでいる奈良県生駒市の公園での活動です。
生駒は、大阪との県境のベッドタウンです。郊外で人口が10万人ちょっと。茅ヶ崎のおよそ半分ぐらいでしょうか。

最初は、自分が移住前に親しんできた環境とちょっと違い、寂しいし全然人との接点がない。そこで、プレスメイキングについて学んできたことを、実際に生駒市でやってみたいと思いはじめました。2019年夏に、近所で未就学の子どものいる家族と繋がりができました。その家族も同じようなモヤモヤを抱えていたことから意気投合し、活動を始めたのが2019年9月です。

最初、2家族から始まった公園の活動で、今から4年半ぐらい前ですね。まだ5年経ってないんですけれども、細々と毎月1回続いている活動で、やっていることはいたって単純です。
毎月第2日曜の午前に、公園に集まって遊ぶというものです。最初の頃は、遊び道具を持っていって、プログラムも決めていたのですが、プログラム通りにやっても窮屈だし、面白くないということが次第にわかってきました。

気がついたら、近所のおじちゃんが子どもに色々教えていたり、こたつの下に湯たんぽを入れて、みんなでこたつを囲むなど、基本子どもがやりたいことやるし、大人も面白そうと思ったことをやりました。
近くの自治会館ともコラボして、地域の夏祭りをやったこともありました。
基本は、ただ集まるだけなんだけど･･･。むしろ、それがみんな気持ちよくて続いているという感じです。
なので、負担に思うようなことはやらないっていうスタイルです。

自分たちが一番何をしたいかというと、子どもが楽しめればいいし、自分たちが楽しめればいい。
お金とか準備に力を掛けすぎると次やるのが大変になるので、あえてそれを外してみようということで、4年半は続いています。

回数を重ねていくと行政の方とも信頼関係ができてきて、例えば公園で火を使うことができました。
最初は、子どもとお母さんが多いパターンだったんですけれども、次第に少し違う年齢層の方とか、男性が来るようになったのです。そして、活動を続けていくうちに「こんなことやっていいんだ」という意識が、やってくる人たちにも芽生えて来ました。

自分たちが何を大事にしたいかってことですが、「日常以上イベント未満」ということ。最初の、一緒にやろうという仲間が出てくれれば、誰でもできるようなことだと思うので、そういう意味で、参考にしてもらえたらいいなという感じです。

団体として行政とか企業の委託を受けて、プレイスメイキングのお手伝いすることもあります。
千葉の河川敷で（団地から離れて寂しいところ）、行政等が仕掛けてプレスメイキングをする時に、どんなやり方があるかを紹介します。

最初はいろんな方が来る中で、やりたいことが出てくるのですが、無理やり一つにまとめず、話し合いながら考えていきます。 出てきたアイデアを絵にまとめたりします。 この時は「リバーサイドフェス」に行き着いたんですけれども、特にその場所のいいところを引き出すという目線で考えられるといいと思います。

具体的には、出てきたアクティビティをいろいろ試してみたということです。 たくさんお金をかけて遠くから呼んでくるというよりは、地元のネットワークに強い方がいたので、地元で提供できるアクティビティをたくさん入れて、協力してくれる方がたくさん集まったという感じです。

プレイスメイキングをやってみたい方も多いと思うので、こんな目線で考えてみるといいというポイントを紹介します。 こんなことをやって見ようかなという時に、4つくらいポイントを持って見るといい感じに近づけられると思います。

1つ目は、「快適さ」と「印象」という話で、どれだけ体感として気持ちよく感じているか、というところです。 安全とか清潔さみたいなところもありますし、座ったりとか、滞在したくなるようなところはどんな感じかなということです。

ちょうどいい日差しと陰みたいなところ。 茅ヶ崎だったら、水辺も多いと思いますし、景色を楽しめるとか、その場所場所で、ちょっと気持ちよくなるにはどういった目線とか、モノがあったらいいかなと考えてみると、実際にそういうところにつながると思います。 自分が、長時間いたら気持ちいいなと、想像してみるといいと思います。「五感」を想像してみるというところですね。想像してみるのが大事かなと思います。

2つ目は、「アクセス」と「接続」という話です。 言い換えると、ちょっと遠くから見て、何かやってるっていうところだとか、歩いて来やすかったりということですね。 駅前の使いやすさだったり、自転車でアクセスしやすい場所だったり、夜に見え方が変わることで、「ここなんか良くなってんじゃん」とか、ちょっと近づきたくなるような目線も大事かなと思います。

3つ目は、「利用」と「活動」です。 活動の種類が多ければ、それだけ関わる人も増えるという話ですね。
滞在する場所だったり、遊ぶものだったり、飲食店はすごく大事ですね。

4つ目ですけれども、ここが一番プレスメイキングとして大事かなと自分が思っているところです。
「社交性」は何かっていうと、人との繋がりだとか、思い入れだとか、多様性とかという要素になります。
プレイスメイキングは、ただ単に人が集まるという以上のもので、何かしてみることで接点ができる、継続的に場所のケアをしていくというところが、非常に大事なところかなと思っています。そういう意味で、関われるような室内であったり、特に多世代で交流ができやすいような仕掛けや工夫が入れられたり、もうちょっと長期的なところになると、しっかりそこの場所をケアしていくっていうところも大事になってきます。

こういった4つの視点を考えながら、それぞれの場所の特徴だとか、特にいい場所っていうところを考えてみるといいと思います。

最後に、トップダウンじゃなく、誰か一緒に「想い」を共通できる人とやることが大事です。
場所の特徴を見て行くと、いろんな手がかり・ヒントがあるし、それを生かせると本当にいいものになると思います。

次ページ ～事例発表

【事例発表 1】

越地 清美さん

「ちがぼ～」2代目の代表をしている越地です。
市内で 2 人の子どもを育てました。

今日は居場所づくりという観点から、私たちが市内の場所をどのように使い倒してきたかということと、行政との関わりという2点から、お話したいと思います。「ちがぼ～」は実は大変歴史のある団体で、2005年に茅ヶ崎に冒険遊び場を作ろう会として作られています。その時の初代代表が竹内で、会場に来ております。

お手元のカラーパンフレットを開いていただくと「ちがぼ～　三つのお約束」というのがあります。
「ちがぼ～」は「プレーパーク/冒険遊び場」っていう名前で呼ばれている活動の一つで、私たちは東京都世田谷区の羽根木プレーパークを母体とする日本冒険遊び場づくり協会の一員として活動しています。その中に、冒険遊び場の形というのががあるんですけど、それを「ちがぼ～」流に解釈したのが、この「3つの約束」です。

まず、子どもが真ん中。
1、「できる限り、ダメよ、遅くなくできるような場を作り、子どものやりたいを応援します。」
2、「怪我と弁当は自分持ち、水遊び、泥遊び、たき火のぼり、冒険遊び場には自然と向かい合う機会がたくさんあります。やりたいに伴う危機や怪我は自分で引き受けます。」
3、「見守るもよし、一緒に遊ぶもよし。同じ思いの大人が緩やかに手をつなぎ、子どもと共にあることを目指します。幅広い世代との交流は子どもたちの心を豊かにします。」

「ちがぼ～」は、任意団体です。NPO法人でもなんでもないです。普通のお母さん達が集まって作りました。

茅ヶ崎市の、行政との協働から始まって委託を受けてやっています。先ほど申しましたように、2005年に「茅ヶ崎に冒険遊びを作ろう会」が発足しました。実は、この時のメンバーは竹内さんと長谷川さんという2名だけでした。私たちは「横浜にプレーパークを作ろうネット」代表の橋本ミチ子さんの講演会に集まった一般お母さんで、最後に「これからこういう会を作りたい」と言われたので、「会員は何人いらっしゃるんですか」と聞いたら、「2名だけです」と言われて、その場にいたお母さんたち全員が入会したという会だったんですけれど、それ以来、初期のメンバーと一緒に活動しています。

そして、私たちの歩みはサポセンと切っても切り離せません。まず、市民活動を推進するげんき基金を2005年から4年にわたって受けています。大変な資料づくりと会計報告を毎回して、4回ともげんき基金を受けることができました。その後は、青少年課との協働事業という流れになりました。

まず最初に、私たちに与えられたのは茅ヶ崎の北の先、堤にある「市民の森」でした。当時、この森は荒れていました。昔は小学生が遠足に行く場所だったそうですけれど、それがどんどん荒れて、ロータリークラブが作った遊具が腐り果て、「あそこは一人じゃ行っちゃいけないよ」と言われるような森だったんです。

当時、緑地課の市民グループが森を何とかしようとしていた時で、ちょうどその活動に合わせて、森で活動を始めました。焚き火もさせていただいて、大変楽しく遊んでましたけれど、子どもが一人じゃ来れないので、子どもが一人でふらりと来れる場所に遊び場を作りたいっていうことが、私たちの願いだったんです。

何回か転機があって、一つは2011年の東日本大震災です。東日本の方は本当に大変だったと思うんですけれど、私たちは土壌の測定から始めましたが、やっぱり森での活動にこだわっていて、ちょうどその時に市から事業委託を受けました。その時に、「茅ヶ崎に冒険遊び場をつくろう会」という、未来への希望を込めた名前から、呼びやすくて人口に膾炙する「ちがぼ～」に改名しました。

ここが結構大きな転換点だったと思いますで、街中への進出を目指して、もう今はない海岸青少年会館で、年3回(夏休み1回、秋休み1回、春休み1回)、活動させてもらいました。この時の館長さんが協力的な方で、平日でも1コマ「ちがぼ～」をやりました。さらに、2015年、会館が取り壊しになる時に、4日間遊び倒そうということで、ペンキで１階から４階までの階段全部にお絵描きをさせていただきました。

残念ながらその会館は壊れてしまい、今度は、うみかぜテラスという施設ができることになりました。
そこを作る時も、私たちは企画段階からどんな施設になったらいい、ということを色々話し合いました。
例えば、公園とうみかぜテラスの連携を確かにするために、外水道を絶対作ってくれ、と。そうしないと、ドロドロになった足で子どもたちが室内に入るから。それが迷惑だとしたら、外水道がないといけない。
そこから連結する部屋には親子ルームがあって、裸足で子どもがゴロゴロできるような部屋にしてほしいと、いうようなことを言いました。

青少年課の方がとても力になってくださったのですが、だんだんと施設の様子が変わってきました。
私たちの知らないところで、施設と子どもたちが色々あったみたいで、職員の子どもに対する警戒心がとても強くなり、「これをしては駄目」という張り紙が多くなってきたところで、コロナ禍が発生しました。

コロナの時は予算を停止されて、活動を停止するように言われました。でも私たちは、そんなことで諦めないので「ちがぼ～」はできないけど、「のらぼ～」ならできるかなということで、市役所前の中央公園で「のらぼ～」を続けました。

私たちは、とにかく誰でもふらりと来れる場を継続することを目標にしています。
20年も続けていると、そこに育っていった子どもも随分大きくなって、子育てをし始めるような年になってきているんです。20年間やってこられたのは、周りの人を巻き込み、乗せる、おだてる力だったんじゃないかと思います。

青少年課の職員の方は、大体3年に1回は人事異動があります。職員の異動の度に、冒険遊び場って何だ？っていうことをイチからお話しして、巻き込んでいくということに慣れました。最近は、若い頃に担当だった方が係長になって、同じ課に戻って来られるというようなこともあります。大事なことは、市役所だろうとどこだろうとそこに立ってるのは、同じ一人の人間だってことだと思います。

コロナ禍の時、周辺住民から煙が臭いとか文句を言われることもあり、実はうみかぜテラスでは「焚き火禁止」と言われたこともあったのですけれど、私たちは「火は先生3人分の働きをしますから、焚き火禁止は絶対駄目です」と言って、はっきり断りました。結局、うみかぜテラス側が折れて、焚き火を続けさせていただくことになりました。

いつも思うんですが、文句はチャンスです。文句が来た時は、それをどういう風にして乗り越えるか。
新しいクリエイティブな、今まで考えつかなかったやり方を展開していくチャンスです。そのように、とてもしぶとく「ちがぼ～」は続いていきます。今回、うみかぜテラスの運営が、市の管轄からタウンニュースという一般企業に変わりました。今後どういうふうになるか、とても楽しみです。

いいことも悪いこともあると思いますけれど、課題が出たら一つひとつ真直ぐに向き合って、そのテーブルの向こうにいる相手も同じ人間だっていうことを心に刻んで、そして、子どもたち中心にやっていこうと思います。だから私は、原っぱ大学のようなあり方も全然ありだと思います。
「ちがぼ～」がやりたいのは、誰でも来れてお金がかからないで、居られる場所というものを作っていきたいし、茅ヶ崎にもっとあってもいいと思います。中学校の学区に一つずつぐらい、こういう遊び場があっていいと思うので、新しい動きは歓迎しますし、「ちがぼ～」として教えられることは、知恵として伝えていきたいと思います。

次ページ ～事例発表２

【事例発表 2】

河内 聖さん

河内聖と言います。
「きんじょの本棚」という、東京町田市でスタートした取り組みの62号店をやっております。ハラペコブックス店の店主代理です。
猫が店主になっているので、私は店主代理としていつもお話ししております。

スーパーカブに本棚を乗せて、無料で本の貸し出しを勝手にしながら歩いてる、という感じの活動をしています。
もともとは、家の前で本棚を出してたんですけど、誰も通らない。だから、本棚の出し損だったんですね。なので、本を押し付けに行こうと思って、バイクに積んでといったところがスタートとなっております。

最近では、家の前よりも勤務先だったり、公園だったり、イベントに呼んでもらったり、というところで本棚を出しています。どこでもいつでも参りますので、お声かけください。

そして、ヨッケリ音楽隊というバンドもやっています。また小学校教員を茅ヶ崎市内でしております。今は6年生の担任をして、本と音楽をテーマに過ごしています。

クラスでもキーワード「そりゃあもういいひだったよ」という絵本があるんですけど、荒井良二さんの素敵な絵本です。毎日毎日「そりゃあもういいひだったよ」と、積み重ねられるといいよねと子ども達にも伝えていて、自分もそれをテーマに楽しく過ごしています。

ハラペコワゴン、1月に茅ヶ崎の市民団体登録をしてみました。中身としては、ハラペコブックス・ハラペコレコード・ハラペコキッチンと、いろんなことを通した居場所づくりをしていきたいと思っています。

この3つが全部のっかっているワゴンということで、ハラペコワゴンという屋号を考えてみました。
来週の土曜日、ここの駐車場で、プレスメイクキングということで、本棚を出させてもらいます。
あと、私、バンドもやってますので、そこでミニライブをやらせてもらおうかと思っておりますので、お越しください。

さて、私は働くのも遊ぶのも境界線をなくしたい、と最近考えていて緩やかに過ごしております。
遊ぶように働き、働くように遊ぶ、というのをテーマに過ごしております。最近は、学校に求められるものって何だろう？っていうことをよく考えているところです。もちろん、学力を身につけてあげなきゃいかんと思うんですけれども、それ以上に居場所としての学校づくりを考えています。

子どもたちの居場所としてサードプレイスが求められている中で、そもそも学校が居場所になってないって、どういうことだろうかと思っています。そもそも「学校とは？」というとこなんですけど、スクールの語源はギリシャ語です。

スクールは、暇（いとま）が語源になっています。暇がなければ、本来学校とは言えない。
「詰め込みでは、本来の学校の姿からは遠のいている」という言葉に出会って、やっぱ、そうじゃなきゃいけないよな・・・、と。学校に来て、休み時間はあれど、大人の監視の中で、「雪が降ったら外で遊ぶな。校庭がぐちゃぐちゃになっちゃうから」、と子どもたちは言われてしまうのです。

自分は、雨が降ってきたら「休み時間は外で遊ぶもんじゃない」と言わなきゃいけない立場にいて、子どもたちは学校に勉強だけしにきているわけじゃないのにな、と思いながら仕事をしています。

せめて自分のクラスとか、自分の学年、できれば学校が居場所としてあればいいなと考えている、ここ数年です。そのためにどんなことをやっているかというと、教室に、4月の一番最初出会った時から「子ども万歳宣言」というのを張り出しております。
「子どもが子どもであることを保証する、小さな大人になっちゃいかん。君たちは、子どもでいいんだ。」

子どもの期間って短いですよね。 できるだけ長い間、子ども時代を過ごしてほしいなと思っています。
今6年生は結構大人なんですよね。 それは駄目だっていう話をしています。

当番活動の一環で「子どもゴコロ制作所」という当番を作っていて、その当番になったら、いたずらとか自由にしなきゃいけないんですね。 典型的なのが黒板消しですね。 子どもたちって普段そんなことしないので、そういう仕掛けをすると静かになってるんですよ。 だからすぐ私にバレちゃう。
ここにいる時は、安心して子どもでいていいよって話をずっと１年間してきています。

宿題も、漢字や計算だけでは面白くないので、題名だけでも面白い宿題を考えようと、こんな宿題を出しています。 「あいうえおちゃん」「三文散文」「相談天国」「名画のつぶやき」「もしや模写？」「ショートショート」「世界からあ行の文字が消えたなら作文」などの宿題を、あの手この手で出しております。

今日は、本の話をさせてください。 毎日読み聞かせをしております。
毎年テーマを作ってるんですけど、今年度は「題名しりとり」です。 一番最初に読んだ本が4月6日に「そりゃあもういいひだったよ」を読んでいるので、次の日は「よ」から始まる題名の本を「しりとり」します。 なかなか楽しいんですよね。

読み聞かせで、どんな本を読んでいいかわからなくなり、選ぶのが大変で止めてしまう先生が多いんですけど、逆にテーマを決めちゃった方が、本は選びやすくなるんです。面白いなと思った本はもちろんだけど、しりとりだから次何読もうかなと、探すようになります。

ビブリオバトル（本の紹介批評合戦）をクラスでやってみたりしています。 とにかく、本を使って居場所づくりをしたいと考えているところです。 どうしてかというと、コロナ禍により4年前の3月1日にから、一斉休校入りました。 卒業式前の1ヶ月間がなくなり、年明けも6月から学校が始まるということがあったんですけど、一番最後まで子どもたちに開かれなかった場所が、図書室だったんです。 音楽室よりも図書室が最後まで開かれなかったんですね。 図書室は、教室に居場所がない子たちが、逃げ込む場でもあるんですよ。

保健室にいける子もいるけど、図書室は、本を読んでればいいいんです。 誰とも関わる必要がなくて、その図書室が開かれないということに対して、本がどうこうではなくて、居場所としての図書室がなくなっている、っていうことにちょっと憤りを感じていて、本を通した居場所づくりに興味を持つようになりました。

ここから、私がやってる「きんじょの本棚」というお話をさせてください。
「きんじょう　みゆき」さんという方が、東京町田市で始めた活動です。
基本的に、どこで借りてもどこで返してもいい本棚となっています。
特に町田は発祥の地なので、たくさん本棚があるんですね。 だから、どこで借りても途中でカフェで読んで、帰りがけにある本棚で返してていいという感じになっている町の本棚です。 今は220箇所以上あると思います。 コロナ禍で急成長してきたのですね。

個人で始めている人や飲食店など。お店を持ってる方はやりやすいのかなと思ってます。最近は、テレビ・ラジオ・新聞でも取り上げられるようになってきました。

こうした活動は、楽しんで無理をしないで続けるっていうのが一番大事かなと思っています。
私は、最初たくさん本棚を出してたんですけど、1回1回出したり仕舞ったりが面倒くさくて、続かないんです。

「きんじょの本棚」のルールは「きんじょの本棚」という看板を出し、本の背表紙に共通のラベルを貼って本を出すだけです。 スタート時に5,000円の登録料（ラベル、看板データ代含む）を払えば、いつでも誰でも始められる活動になっています。 ご興味ある方は言っていただければ、お繋ぎいたします。

そういうものを使って、街の中でいろんな人が緩やかに繋がっていくのが一番いいと思っています。
今日、いろんな方のお話を聞き、どこかに所属してないと大きなことはできないと思ったけれど、個人でできることも、きっとあるのではないでしょうか。

本棚がいろんな場所にあるのは素敵だなとか、楽しいなって思ったりしますので、ぜひご興味のある方は始めていただきたいし、例えば、今日来ている「ちがぼ～」さん、たんぽぽハウスさん、里山公園、茅ヶ崎市役所とか、もちろん、自分で始めていただいてもいいし、無理だったら、私が本棚を置きに行くという活動も考えられるので、この後の交流会で、いろんなお話ができたらなと思っております。